

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1362集

さん の う  
山王遺跡 10

— 第12次調査報告 —

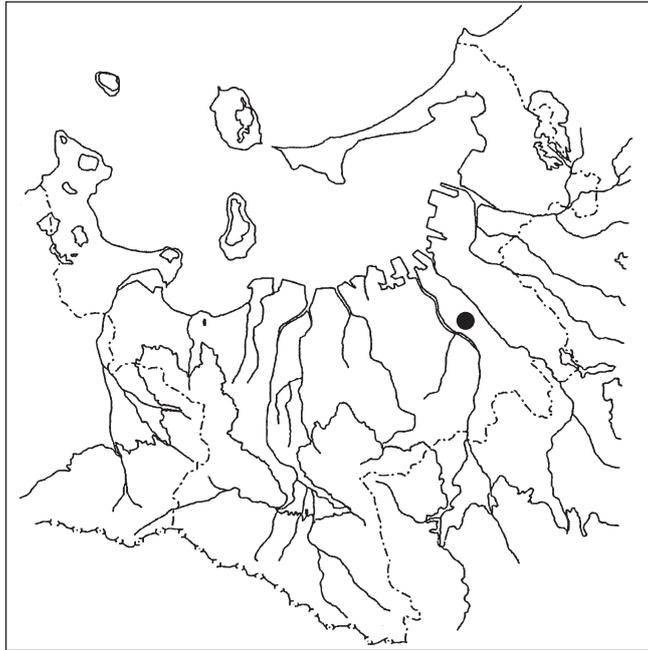
2019

福岡市教育委員会



さん の う  
**山王遺跡 10**

— 第12次調査報告 —



遺跡略号 SNN-12  
調査番号 1716

2019

福岡市教育委員会



## 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は保育園建設工事に伴う山王遺跡第12次調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡を検出し、貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、事業者であるアートチャイルドケア株式会社様ならびに委託者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星 子 明 夫

## 例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が保育園建設工事に伴い、福岡市博多区山王2丁目地内で平成29年8月8日から同年10月16日にかけて発掘調査を実施した、山王遺跡第12次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 遺構の実測と写真撮影は上角智希が行った。
4. 遺物の実測と写真撮影は上角が行った。
5. 製図は上角、大庭友子が行った。
6. 出土した鋳型について、宮井善朗氏（福岡市埋蔵文化財センター所長）に実測と所見の執筆を依頼した。
7. 本書で用いる方位は磁北である。
8. 本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
9. 座標・標高は、都市再生街区基本調査成果の補助点2A696 (H=6.200m) から引照した。
10. 本書に使用した遺構略号は以下の通りである。  
SC 竪穴住居、SD 溝、SE 井戸、SK 土坑、SP ピット
11. 本書に関わる記録・遺物等は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
12. 本書の執筆・編集は上角が行った。

遺跡名	山王遺跡	調査回数	12次	調査略号	SNN-12
調査番号	1716	分布地図図幅名	37 東光寺	遺跡登録番号	401322379
申請地面積	541.77㎡	調査対象面積	340㎡	調査面積	368㎡
調査期間	平成29（2017）年8月8日～10月16日			事前調査番号	28-2-1020
調査地	福岡市博多区山王2丁目38-1				

## 本文目次

第1章	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
第2章	遺跡の立地と環境	3
1.	立地と歴史的環境	3
2.	既往の調査	4
第3章	調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	竪穴住居	9
3.	井戸	9
4.	土坑	11
5.	溝	11
6.	その他の遺物	15
7.	銅戈鋳型（宮井善朗）	16
第4章	まとめ	17

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	2
第2図	昭和初期の山王遺跡周辺（1/6,000）	3
第3図	調査地点位置図（1/5,000）	4
第4図	第12次調査地点位置図（1/300）	5
第5図	遺構配置図（1/100）	6
第6図	SC01実測図（1/40）	7
第7図	SC01出土遺物実測図1（1/3）	8
第8図	SC01出土遺物実測図2（1/4）	9
第9図	SE10・11実測図（1/40）	9
第10図	SE11出土遺物実測図（1/3、22は1/4）	10
第11図	SK04・09および出土遺物実測図（1/40、1/20、1/3）	12
第12図	SD03・05・06・07土層断面図（1/40）	13
第13図	SD03出土遺物実測図（1/3）	13
第14図	SD05・06出土遺物実測図（1/3）	14
第15図	SD07出土遺物実測図（1/3）	14
第16図	その他の古墳時代遺物実測図（1/3、67は1/1）	15
第17図	その他の弥生時代遺物実測図（1/3）	15
第18図	SP154出土鋳型および土器実測図（1/2）	16

## 写真目次

写真1	1区全景（南東から）	18
写真2	2区全景（北西から）	18
写真3	3区全景（西から）	18
写真4	1区西壁土層	19
写真5	2区西壁土層	19
写真6	2区南壁土層	19
写真7	SC01検出状況（南東から）	19
写真8	SC01完掘状況（南東から）	19
写真9	SK04掘削作業（西から）	19
写真10	SK04完掘状況（北から）	19
写真11	SK09（東から）	19
写真12	1区SD03（南から）	20
写真13	1区SD05・06（北から）	20
写真14	2区SD06・07掘削作業（南から）	20
写真15	2区SD06・07完掘状況（南から）	20
写真16	3区SD07完掘状況（北から）	20
写真17	3区SD07完掘状況（南から）	20
写真18	SE10（南西から）	20
写真19	SE11（南西から）	20
写真20	出土遺物	21

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区山王2丁目38番1における保育園建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成29年2月24日付で受理した（事前審査番号28-2-1020）。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である山王遺跡に含まれていることから、平成29年4月4日に試掘調査を行った。試掘では敷地のほぼ全面にわたって弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が現地表下80cmで検出された。

遺構の保全等に関して申請者と協議を行ったが、工事による埋蔵文化財への影響が回避できないため、工事が行われる範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成29年8月1日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年8月8日から発掘調査を、翌平成30年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

## 2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：平成29年度・資料調査：平成30年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財課長 常松幹雄（29年度）

文化財活用部埋蔵文化財課長 大庭康時（30年度）

（平成30年度に部の名称が変更された）

同課調査第1係長 吉武学（29・30年度）

庶務：文化財活用課管理調整係 松原加奈枝（29・30年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（29・30年度）

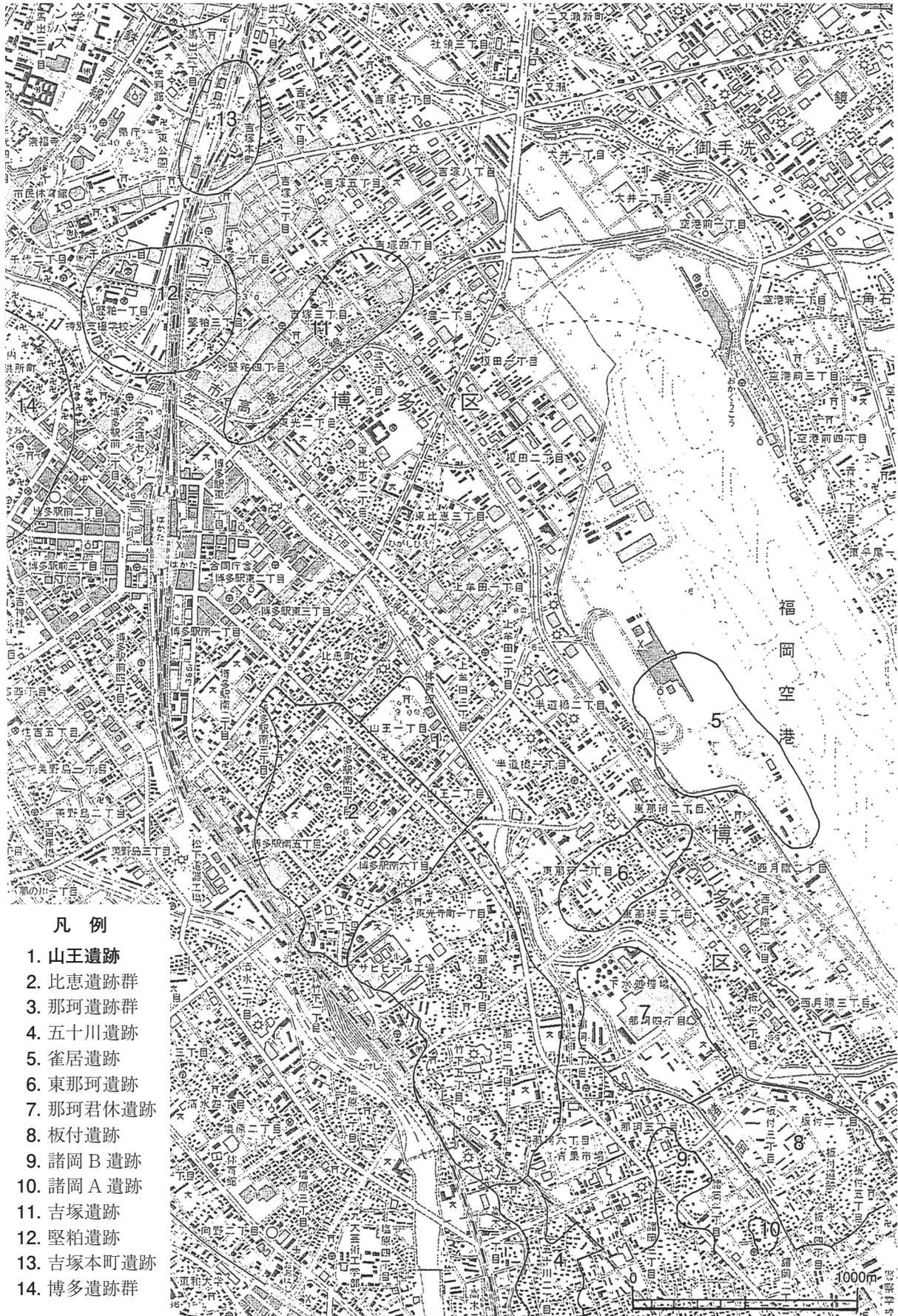
同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（29年度）

田上勇一郎（30年度）

同課事前審査係文化財主事 清金良太（29年度）

朝岡俊也（30年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第1係主任文化財主事 上角智希（29・30年度）



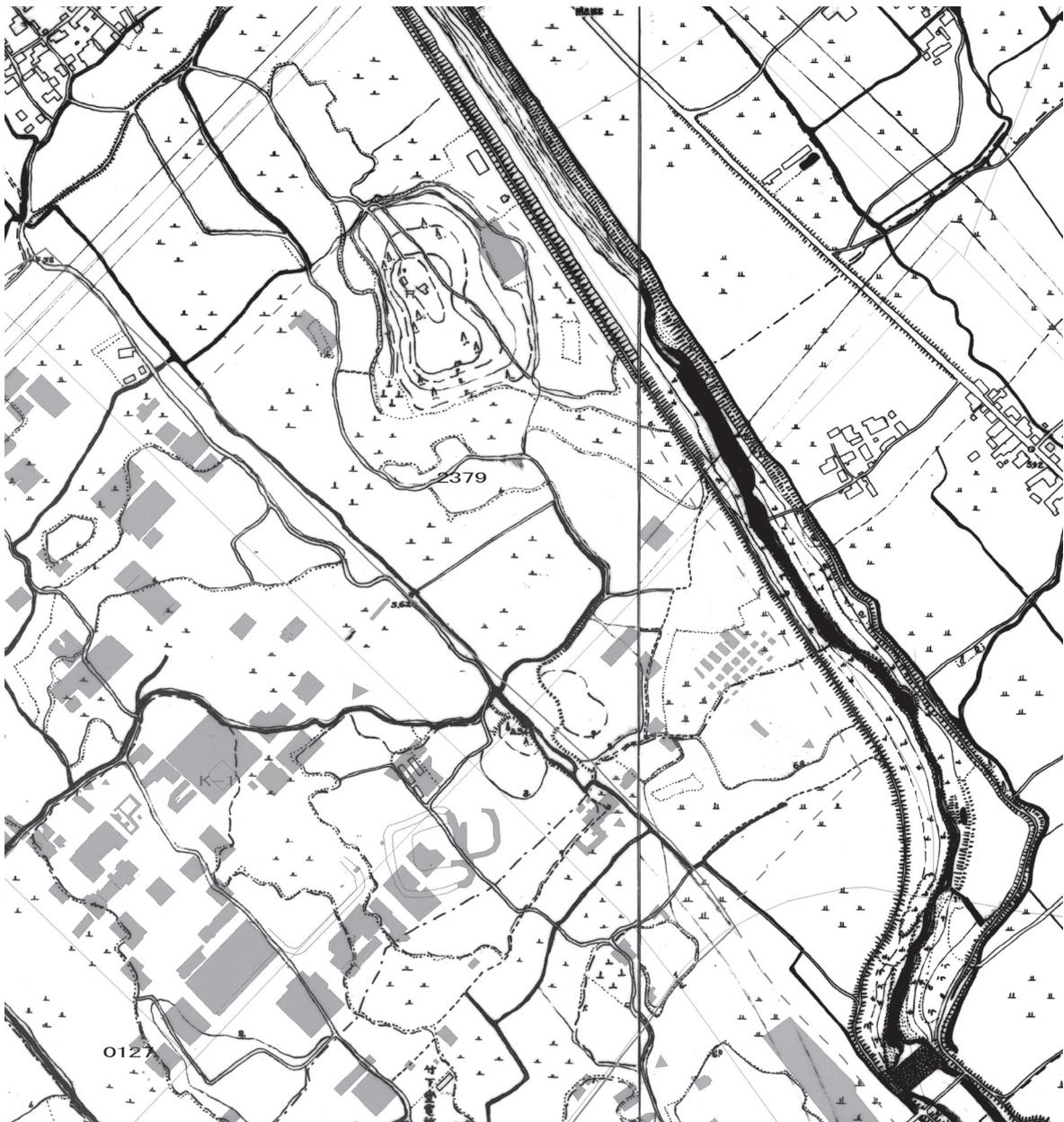
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 1. 立地と歴史的環境

福岡平野の中央部、博多湾に向かって北西に流れる御笠川と那珂川に挟まれた地域には、阿蘇山火砕流堆積物起源の鳥栖ローム、八女粘土層を基盤とする洪積台地が、春日市須玖から福岡市博多区博多駅南地区にかけて延びている。この台地上には、比恵遺跡群、那珂遺跡群、板付遺跡などの重要遺跡が密集している（第1図）。

山王遺跡は比恵遺跡群の北東側に隣接して位置する。東側は御笠川を境とする。昭和初期の古地図（第2図）を見ると、山王を祀る日吉神社が置かれた標高11m強の独立丘がある。現在は山王公園と



第2図 昭和初期の山王遺跡周辺 (1/6,000)

なっている。山王の地名がこの日吉神社に由来することは言うまでもない。日吉神社が置かれた丘陵は前方後円墳の形状をしている。『福岡県神社誌』によれば、寛文6～元禄10年の間に昔社があった所を整地したところ、「石の櫃」が掘り出され、その中に「銅にて作りたる圓き形なる物」があったとの記録が残されている。古墳の石室および銅鏡であろうか。

旧来の地形は那珂・比恵遺跡群の立地する台地から、北東側にむかって枝状に派生する丘陵が延びていたものと思われる。また、古代の官道が山王遺跡と比恵遺跡群との間の谷部を通っていることが、比恵遺跡第79次調査において判明した。

## 2. 既往の調査

山王遺跡では平成30年末現在で15次にわたる調査が行われている（第3図）。以前は第1・3・4次調査地点周辺に限定して比恵甕棺遺跡として登録されていたが、その後、現在の範囲に拡張されている。とくにここ数年間に山王遺跡内での開発が盛んになり発掘調査の事例が急増している。



第3図 調査地点位置図 (1/5,000)

## 第3章 調査の記録

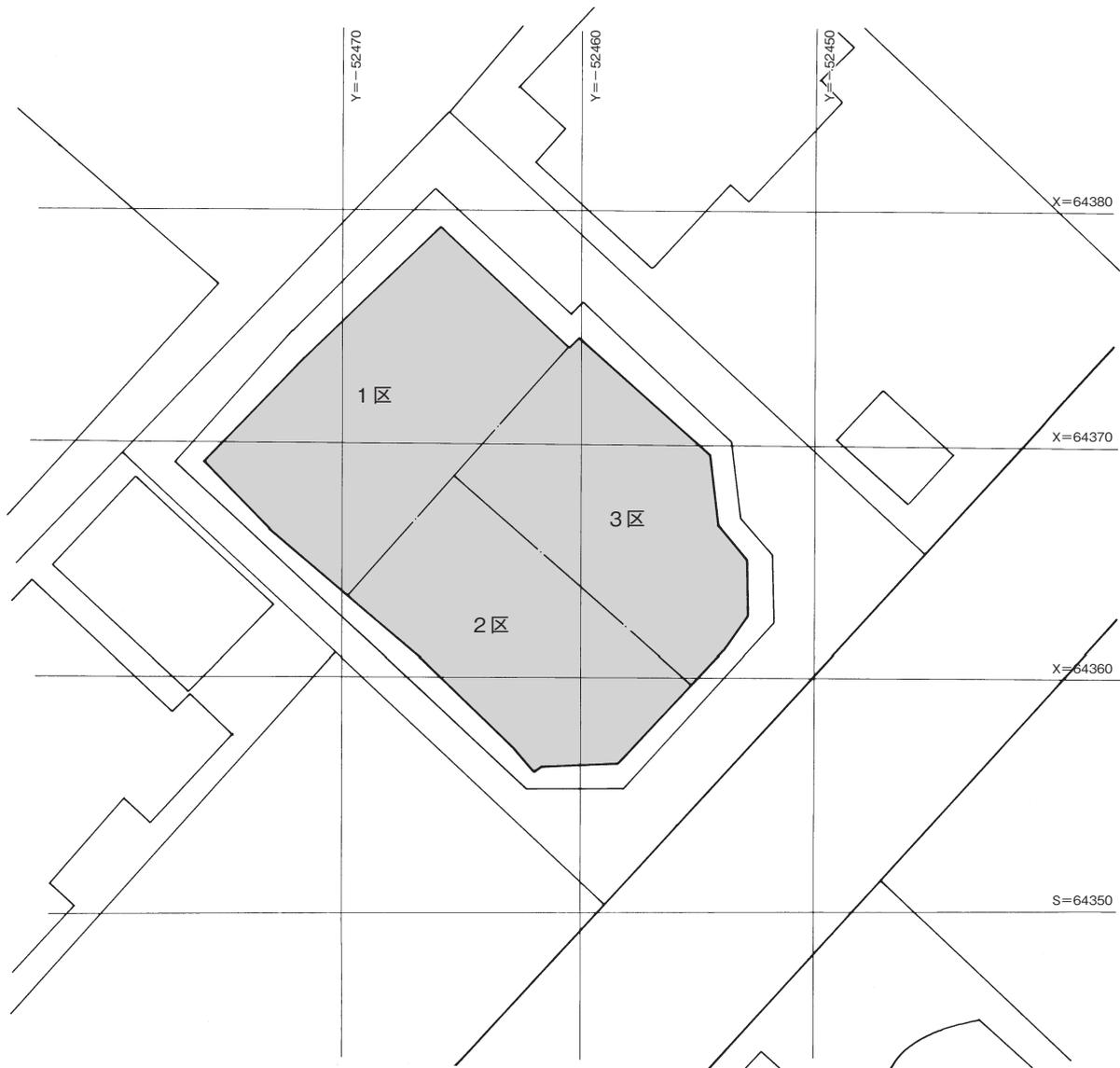
### 1. 調査の概要

#### 【調査区の設定】(第4図)

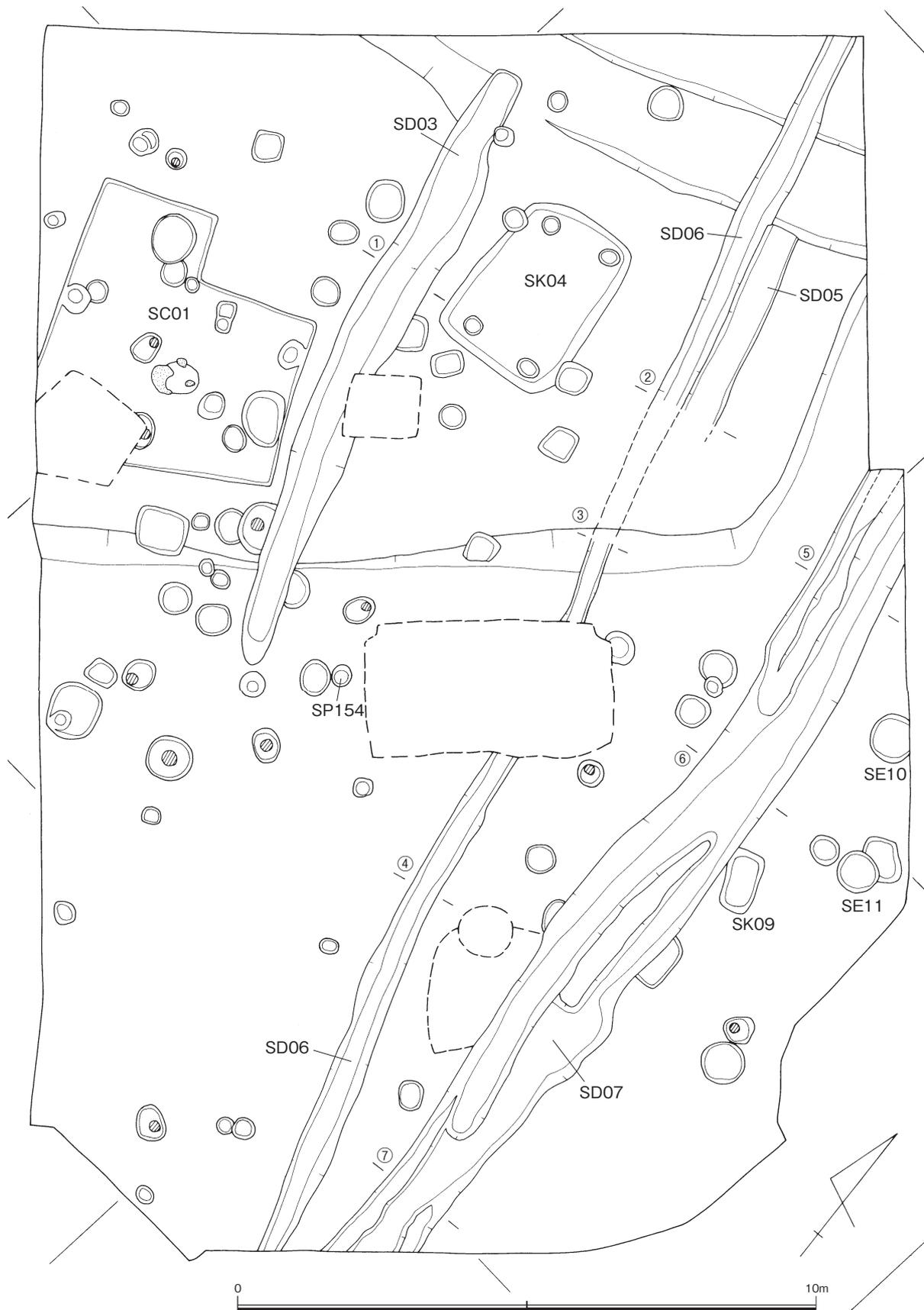
調査地の現況は駐車場であり、以前は運送会社があったとのこと。昭和20年代の古地図では周辺一帯は水田であり、本地点区周辺だけが微高地になっていたようである(第2図)。標高は敷地北端で5.6m、南端で5.2mを測る。敷地面積541.77㎡のうち建築工事により遺跡が破壊される340㎡が調査対象となり、調査区上端で368㎡の範囲を実際に調査した。調査は、排土を敷地内で処理する都合から、1区・2区・3区に分けて行った。

#### 【層序】(写真4～6)

標高4.1～4.7m(現地表GL-130～80cm)でローム層になり、その面で遺構を検出した。遺構面は北側が高く南側が低い。ローム層の上には灰色～小豆色の粘土が堆積する。戦後まで水田として利用されていた土である。2区西壁では50cm程度堆積するが、広い範囲で深く抉られ20cm程度しか残らない。それより上は戦後の客土である。



第4図 第12次調査地点位置図 (1/300)



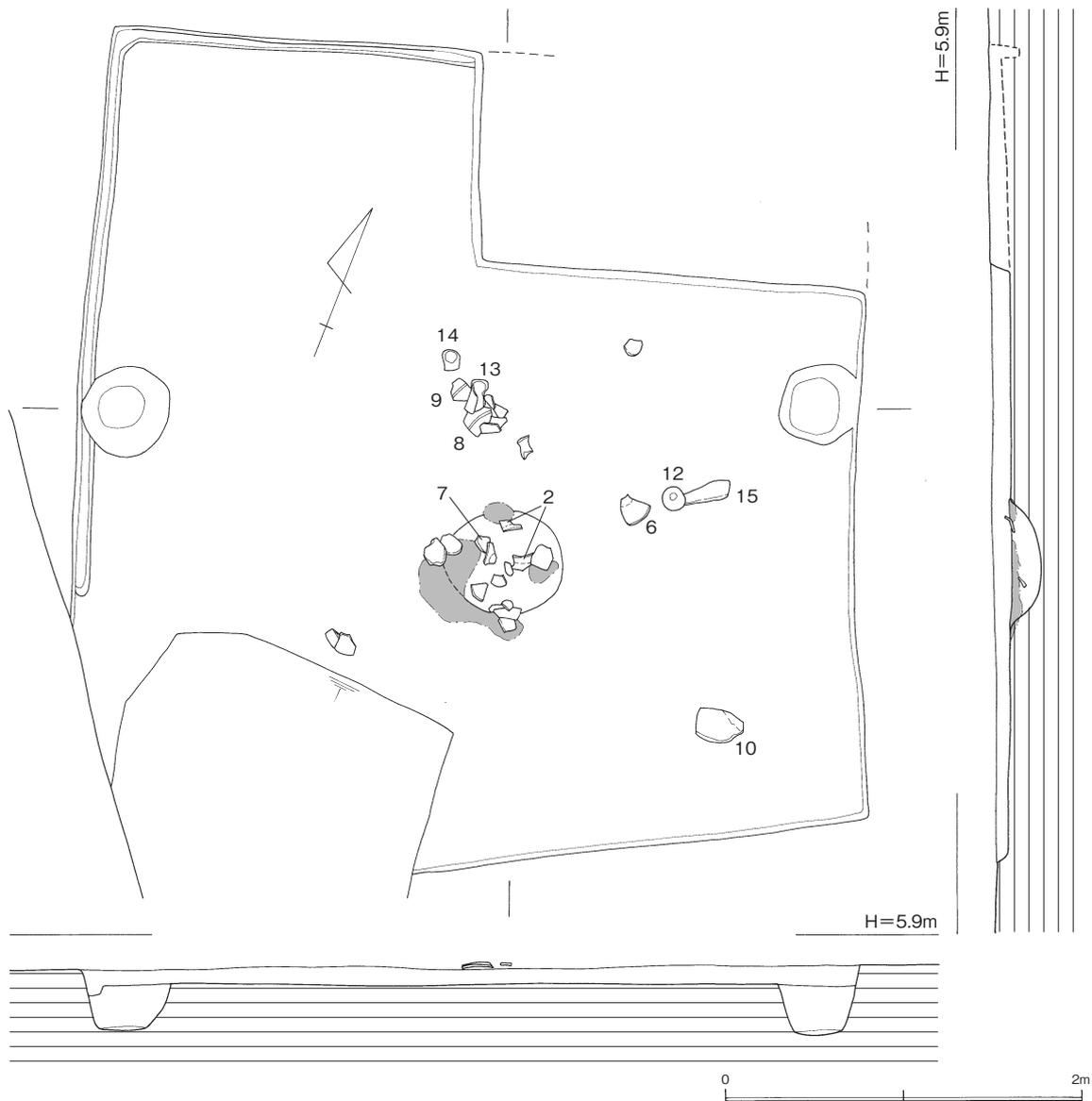
第5図 遺構配置図 (1/100) ①~⑦は第12図土層図の位置

【遺構面】（第5図）

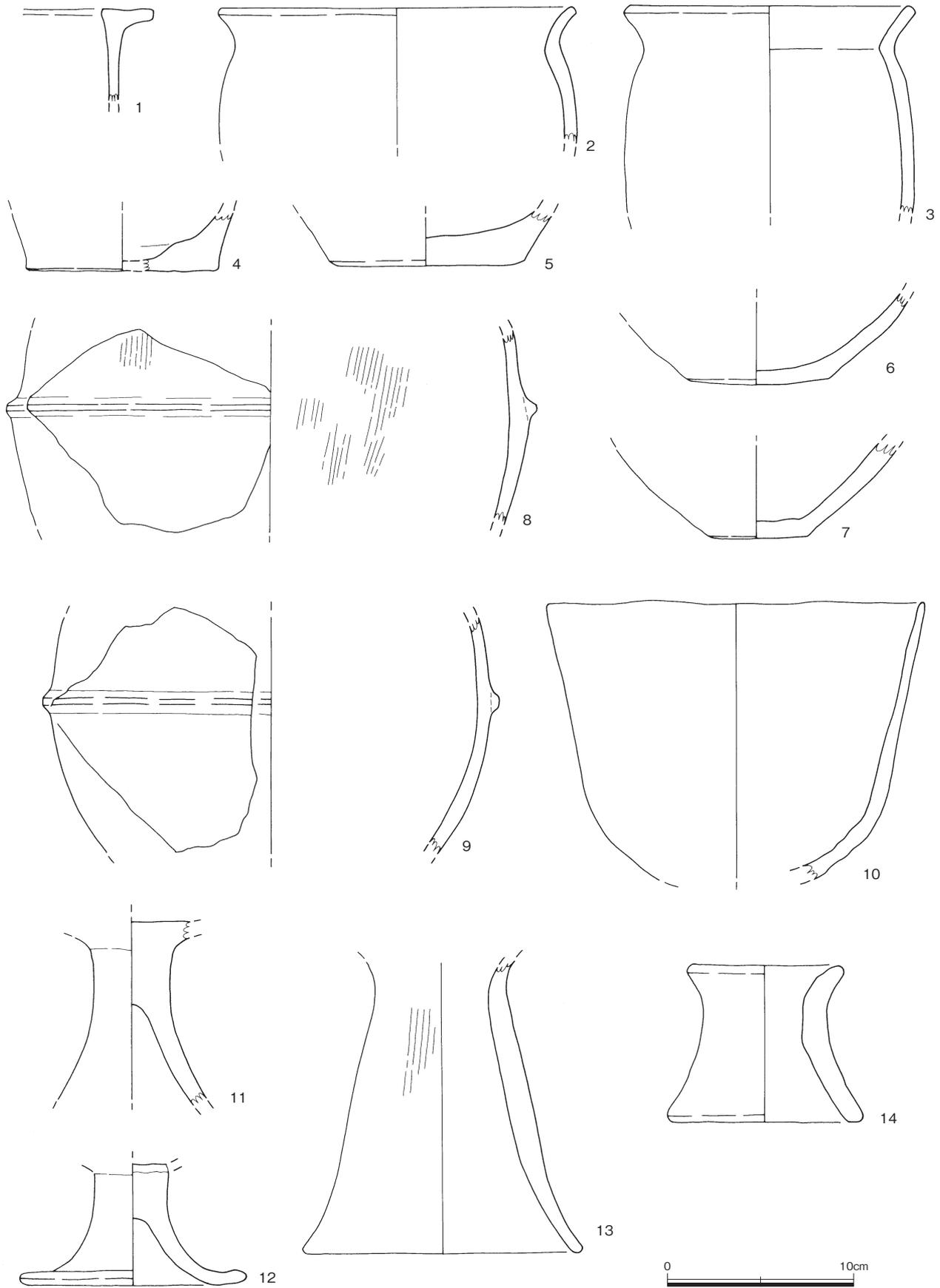
遺構検出面の標高は北端で4.6m、南端で4.2mを測る。1区と2・3区の境界付近に比高差25cm程度の段差がある。おそらく戦後まで残っていた水田の畔（境界）であろう。1区・2区を縦断する古墳時代の溝の深さを測ると、2区のほうで浅くなるので、古墳時代当時はなだらかに傾斜する地形であったが、後世に2区のほうを削平したものと推測する。

【検出遺構】（第5図）

弥生時代中期の土坑2基・井戸1基、弥生時代後期の竪穴住居1軒・井戸1基、古墳時代後期から平安時代にかけての溝4条のほか、ピット約80基を検出した。埋土の色で柱痕跡を確認できる柱穴もかなりある。遺物は弥生土器、土師器、須恵器などコンテナ17箱分が出土した。ピットSP154から銅戈の鑄型が出土したことが特筆される。



第6図 SC01実測図（1/40）



第7图 SC01出土遺物実測図1 (1/3)

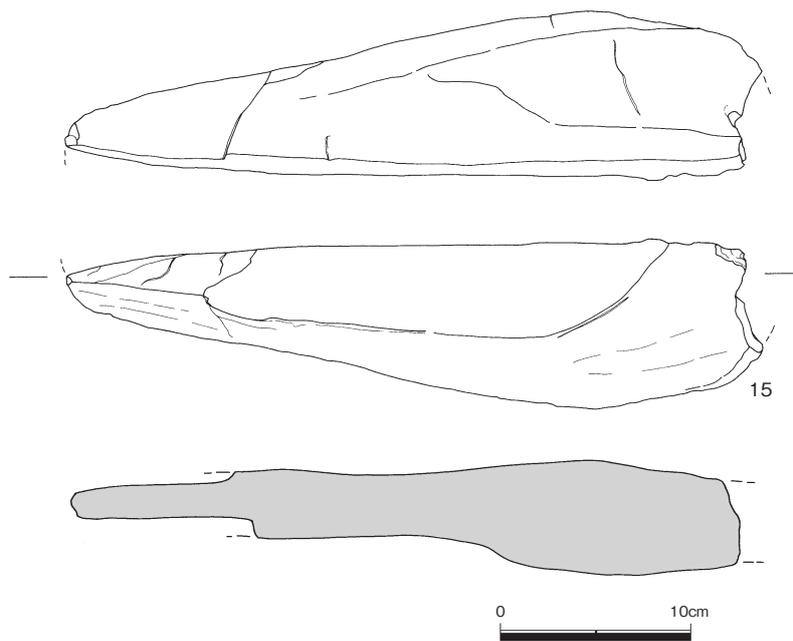
## 2. 竪穴住居

SC01 (第6図、写真7・8)

東西4.4m、南北4.6mの方形の竪穴住居である。北東隅に2.2×1.2mの長方形のベッド状遺構を設ける。床面までの深さは10cmしか残っておらず、ベッド状遺構は遺構検出時にすでに露出していた。南西隅は攪乱により消失する。支柱穴は東壁、西壁の中央に1つずつある。また、西壁と北壁沿いにだけ壁溝がめぐる。住居中央のやや南寄りに地床炉を設ける。炉の付近の床が赤く焼け、炉内から炭混じりの赤く焼けた土とともに甕の破片(第7図2・7)が出土した。住居床面から土器が出土しており、遺構図の土器に付した番号は第7図の遺物掲載番号と一致する。弥生時代後期のものが多いが一部弥生中期の遺物も混じる。

第7図1～3は甕である。1はL字形口縁、2・3はく字状口縁である。4～7は甕か壺の底部である。平底のものと凸レンズ状のものがある。8・9は複合口縁壺の胴部である。いずれも突帯がめぐる。10は鉢である。口径20.0cm。11・12は高坏である。長脚と短脚がある。13・14は器台である。

第8図15は大型の砥石である。長さ36.7cm、幅8.8cm、厚さ6.1cmを測る。割れて一部のみ残る。上面だけを砥石として使用する。材質は頁岩であろう。



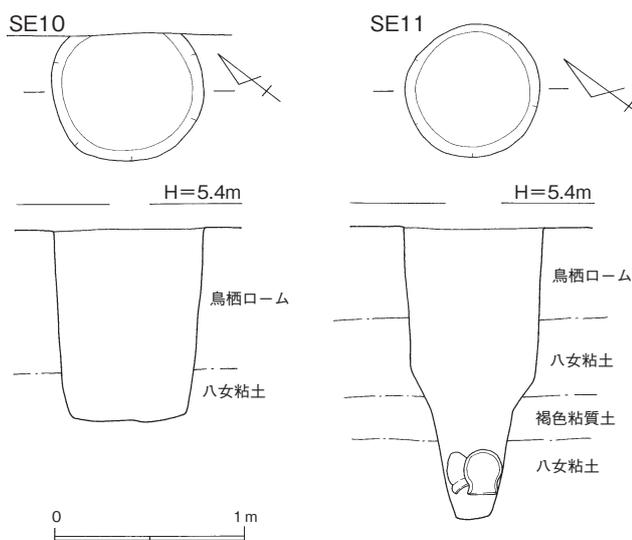
第8図 SC01出土遺物実測図2 (1/4)

## 3. 井戸

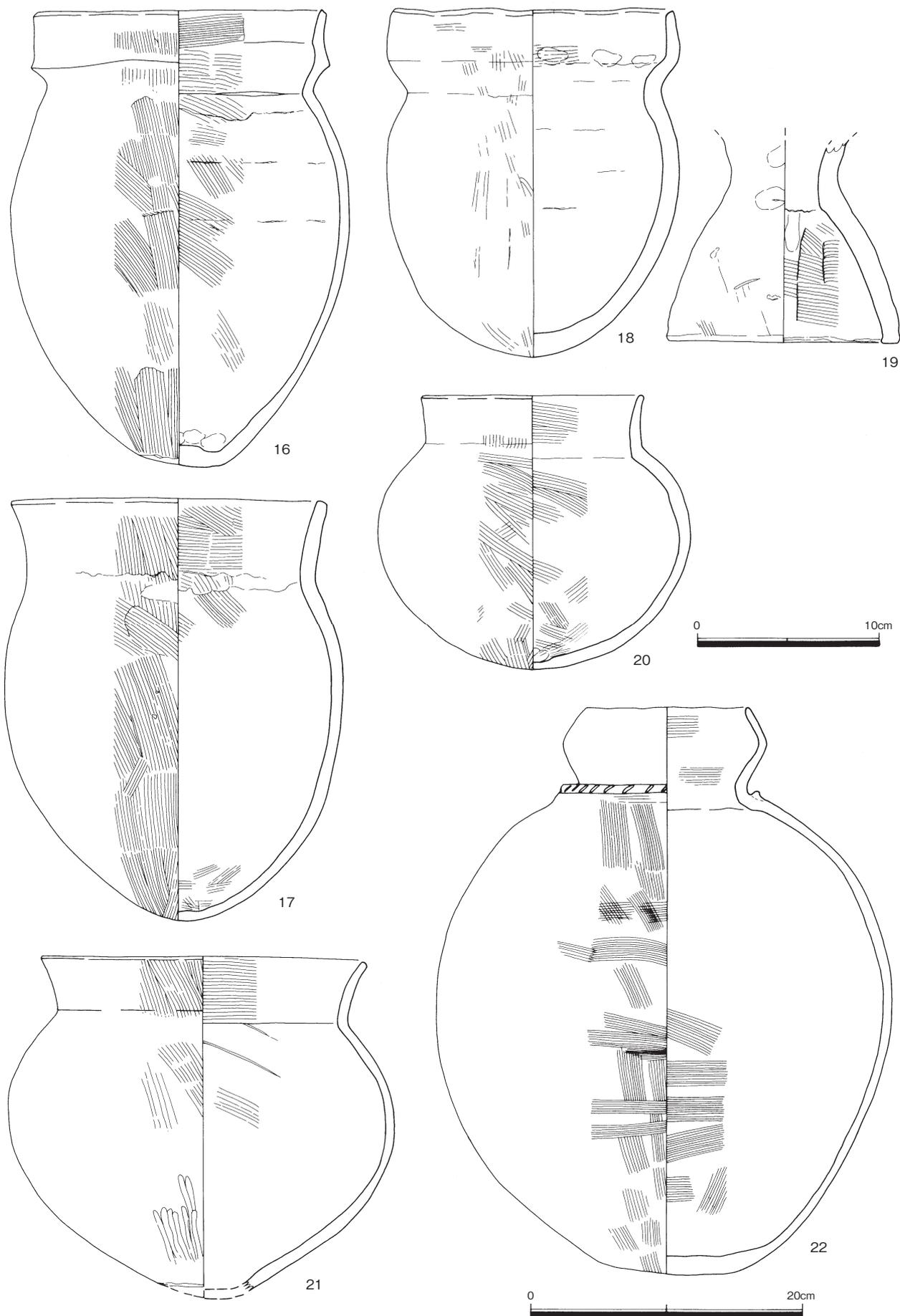
調査区の東端で井戸2基を検出した。平面プランはいずれも直径80cm程度の円形であり、はじめは柱穴だと考えて掘っていたが、非常に深かった。重機で断ち割って底を確認した。

SE10 (第9図、写真18)

平面プランは直径80cmの円形で、深さは100cmを測る。底面の標高は4.25mで八女粘土層まで掘り抜いている。埋土は黒褐色土。遺物は小片が少量出土した。いずれも弥生土器で、平底の甕底部があることから、時期はおそらく弥生時代中期であろう。



第9図 SE10・11実測図 (1/40)



第10図 SE11出土遺物実測図 (1/3、22は1/4)

#### SE11 (第9図、写真19)

平面プランは直径70cmの円形で、深さは155cmを測る。底面の標高は3.7m。埋土は黒褐色土。中ほどまではほぼ垂直に掘っているが、そこからすぼまっていく。重機で断ち割った井戸の底付近から完形の甕や壺が6点出土した。時期は弥生時代後期である。

第10図16～18は甕である。16は複合口縁で口径16.0cm、器高25.4cmを測る。17は頸部の屈曲が弱く口縁部はやや外傾する。口径17.3cm、器高23.6cmを測る。18は複合口縁の形状を呈するが、接合部の稜は不明瞭で器壁が厚い。胴部内面には粘土板の接合痕が確認でき、粗い作りである。口径15.4cm、器高19.3cmを測る。19は支脚か。20～22は壺である。20は小型の直口壺で口径12.2cm、胴部最大径17.2cm、器高15.2cmを測る。21は広口壺で口径17.8cm、器高18.3cmを測る。22は大型の壺で口縁部は袋状を呈し頸部に突帯をめぐらす。口径12.0cm、胴部最大径33.5cm、器高42.2cmを測る。

### 4. 土坑

#### SK04 (第11図、写真9・10)

長辺3.1m、短辺2.1～2.3m、深さ65cmを測る大型の方形土坑である。埋土は黒褐色粘質土。底面の四隅に不明瞭ではあるが柱穴と思われる浅い掘り込みを確認した。弥生時代中期から後期にかけての土器細片がコンテナ2箱分出土した。ところが土器片がまったくと言ってよいほど接合しない。

遺構の性格がよくわからない。四隅に柱穴があるので地上に構造物を伴っていただろう。竪穴住居にしては小さい。貯蔵穴かとも考えたが、方形の貯蔵穴がつけられるのは弥生時代前期までのようなので時期が合わない。床面に穀物等を貯蔵した痕跡も確認できない。しかし、土坑の中には、すでに割れて破片となっていた土器—それも時期幅がある—を大量に放り込んでいる。ごみ穴とするならば、方形に整った深い穴を掘る必然性と柱穴の存在が説明できない。土坑が本来の機能を終えた後に土器片を投棄したのかもしれないが、理解に苦しむ遺構である。

第11図23～26は甕の口縁部である。鋤形口縁、L字形口縁、く字状口縁があり、丹塗りを施したものもある。27は高環の口縁部で、内外面に丹塗りを施す。28～30は甕の底部である。いずれも薄い平底である。

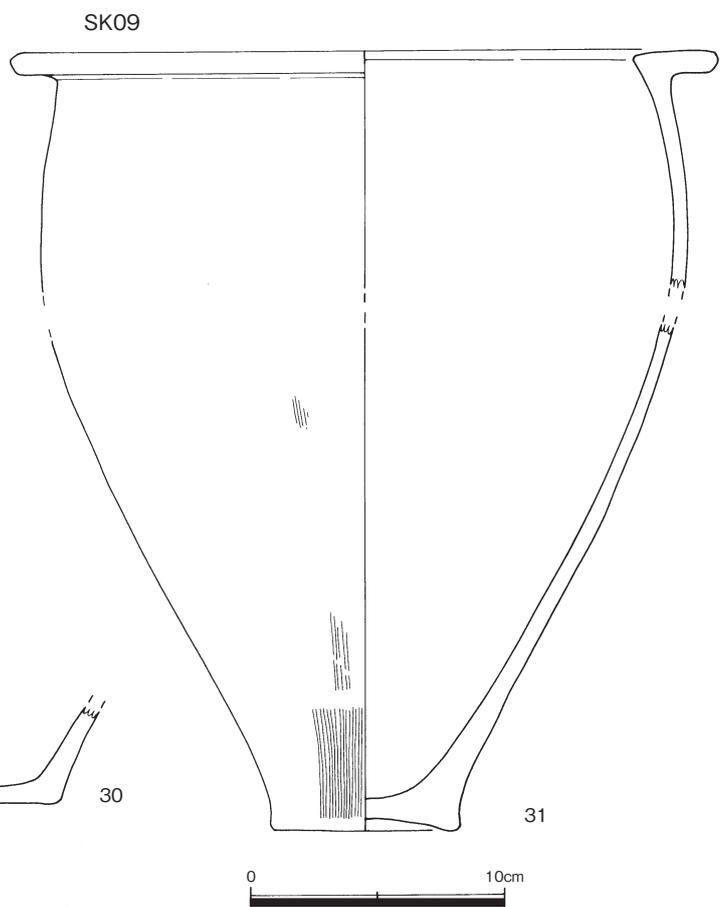
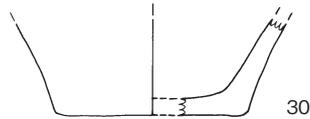
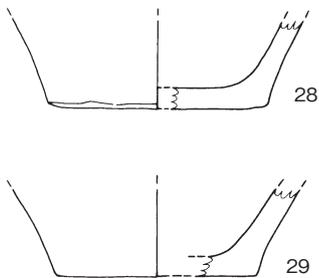
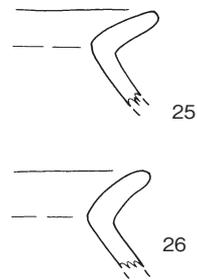
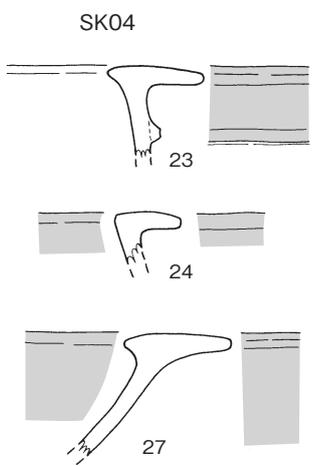
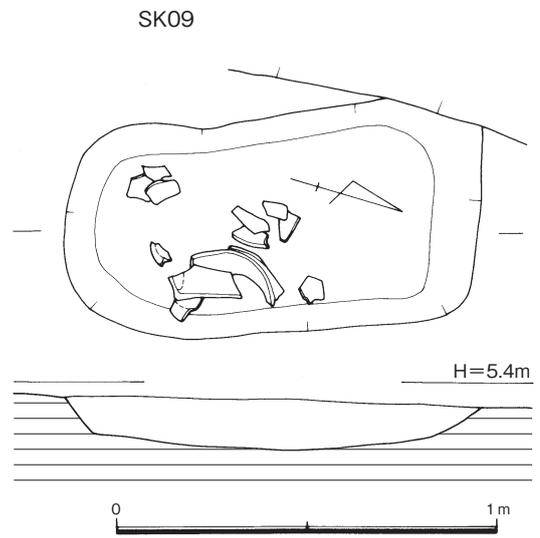
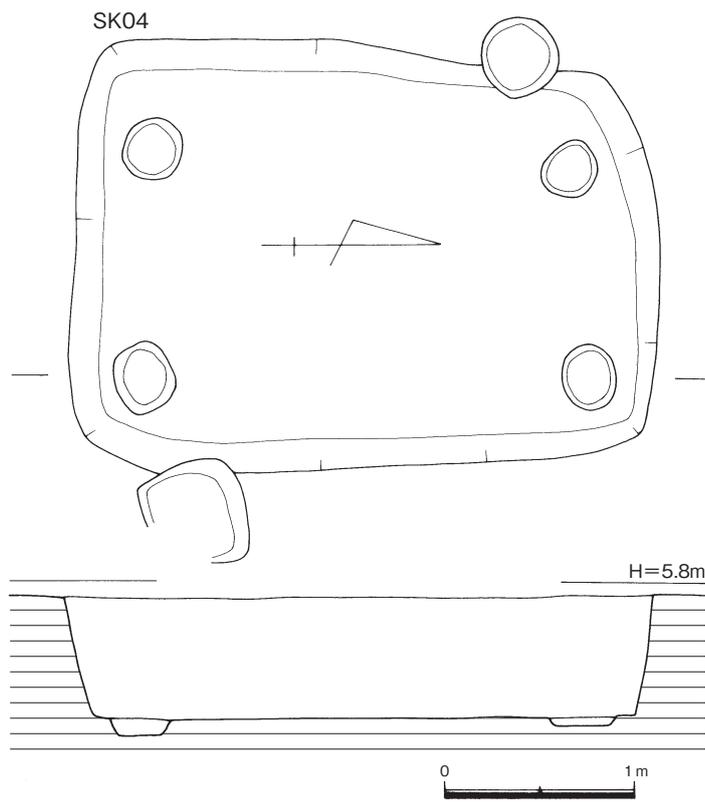
#### SK09 (第11図、写真11)

長辺1.1m、短辺0.6mの長方形の土坑で、深さは20cmを測る。弥生時代中期の甕1個体が割れた状態で出土した。

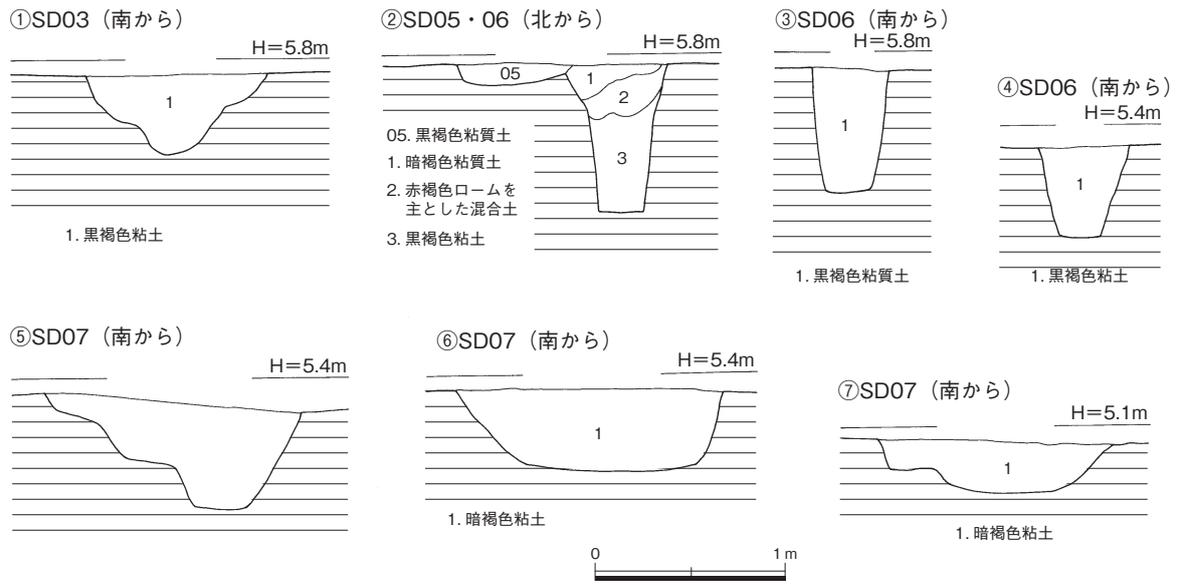
第11図31は甕である。L字口縁で内側にも少し突き出す。底部はやや上げ底である。口径27.8cm、器高32.1cm、底径7.4cmを測る。

### 5. 溝

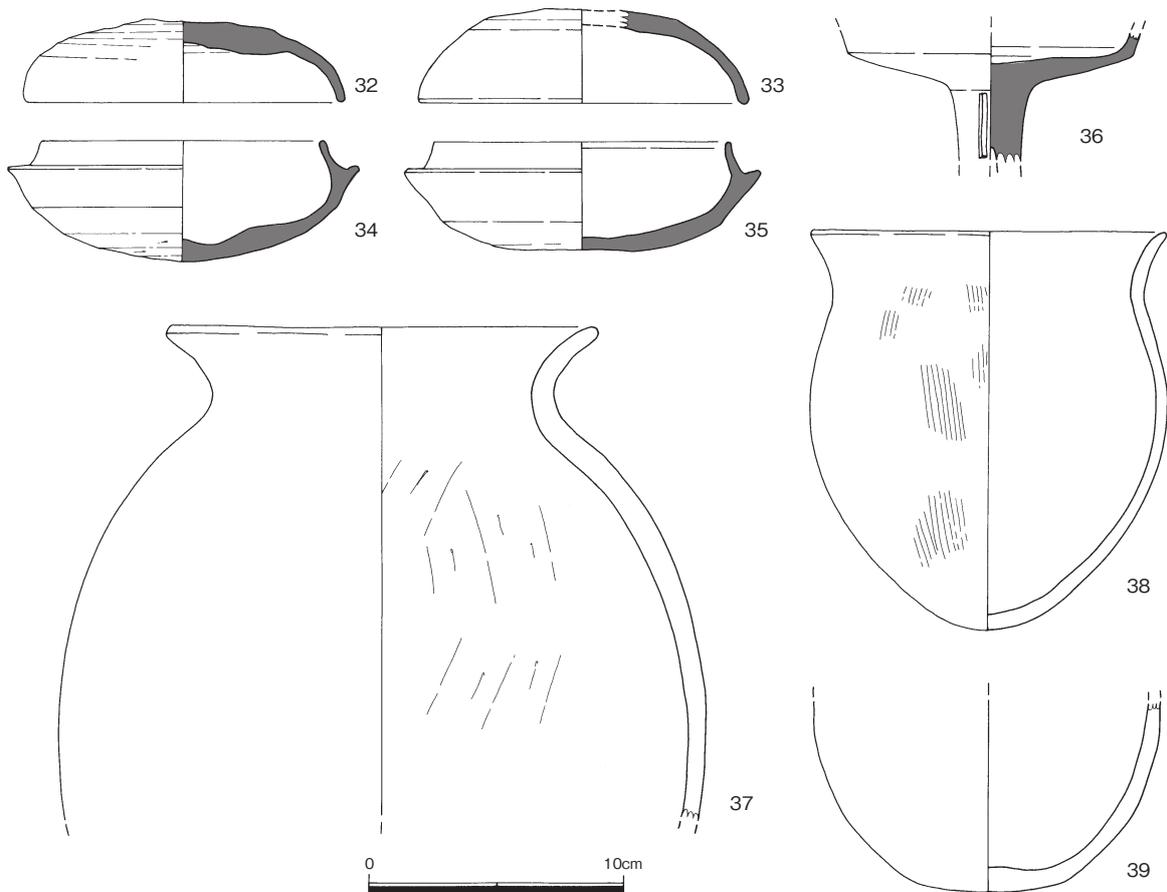
古墳時代後期から平安時代にかけての溝4条を検出した。どの溝もほぼ南北方向に走っている。SD03とSD05は北側だけで検出し、南側では途切れているように見えるが、これは遺構検出面の標高が北側は高く南側は低いという事情による。つまり、この2つの溝は浅いため、後世の水田開発で調査区南側の地面が削平された際に南側が消失したものと推測される。SD06だけは狭い幅で深く垂直に掘り込まれており、他の溝とは形状が異なる。第12図に土層断面図を示す。



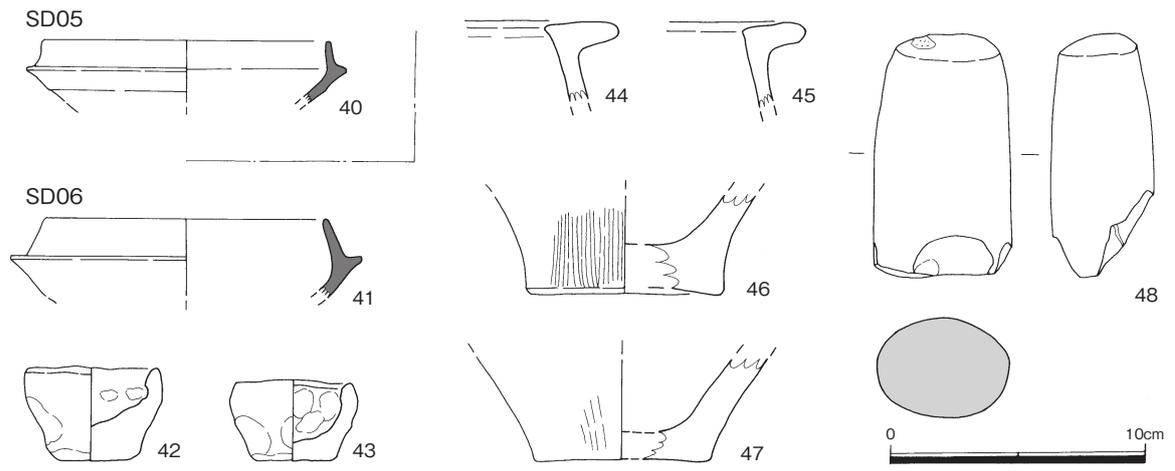
第11図 SK04・09および出土遺物実測図 (1/40、1/20、1/3)



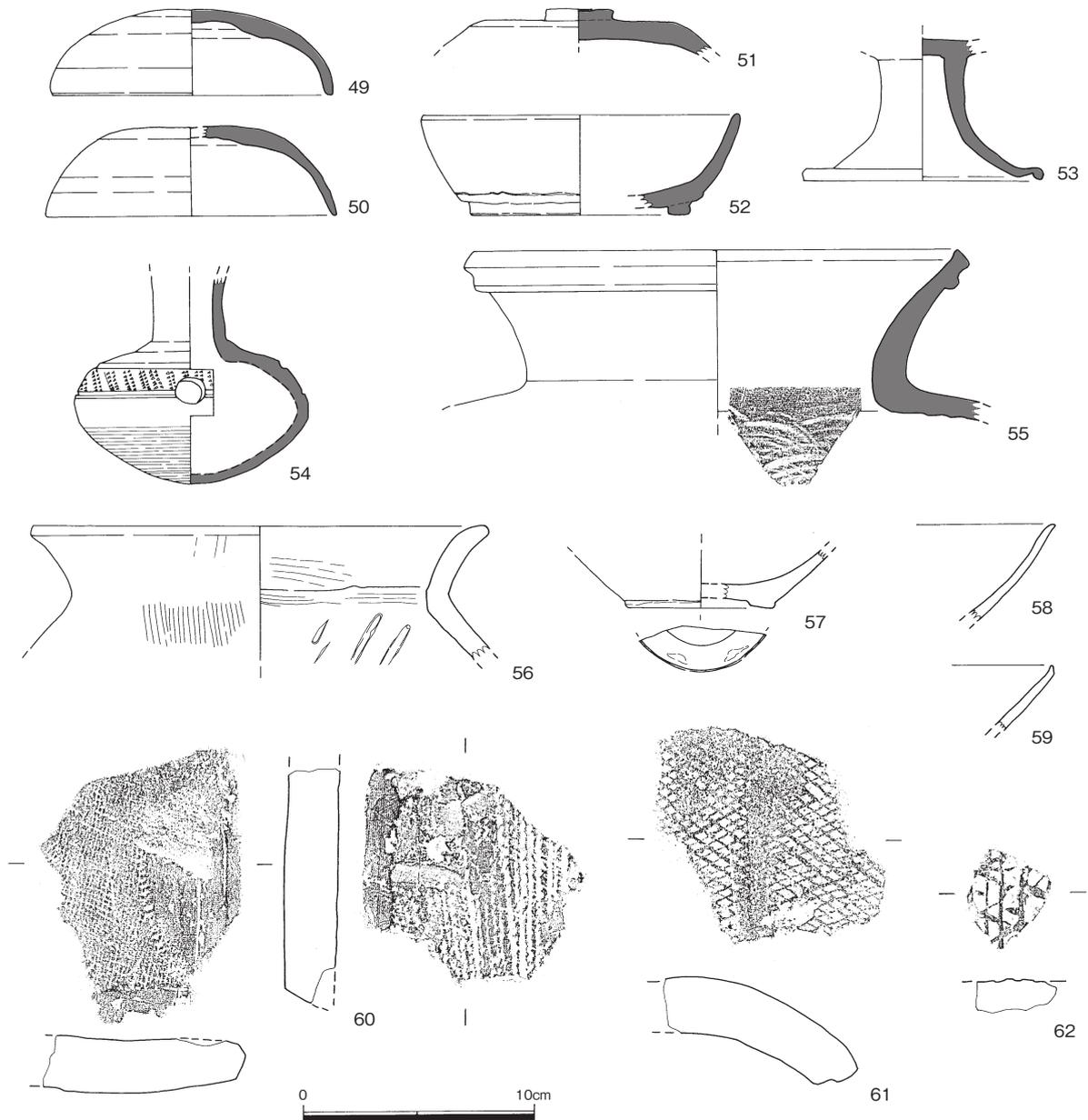
第12図 SD03・05・06・07土層断面図 (1/40)



第13図 SD03出土遺物実測図 (1/3)



第14図 SD05・06出土遺物実測図 (1/3)



第15図 SD07出土遺物実測図 (1/3)

SD03 (第12図、写真12)

第13図32・33は須恵器の坏蓋である。34・35は須恵器の坏身である。返りは内傾気味に比較的高く立ち上がる。36は須恵器の高坏である。脚部に細長い透かし孔を開ける。37は土師器の甕である。38・39は土師器の小型甕である。

SD05 (第12図、写真13)

第14図40は須恵器の坏身である。返りの立ち上がりは低い。

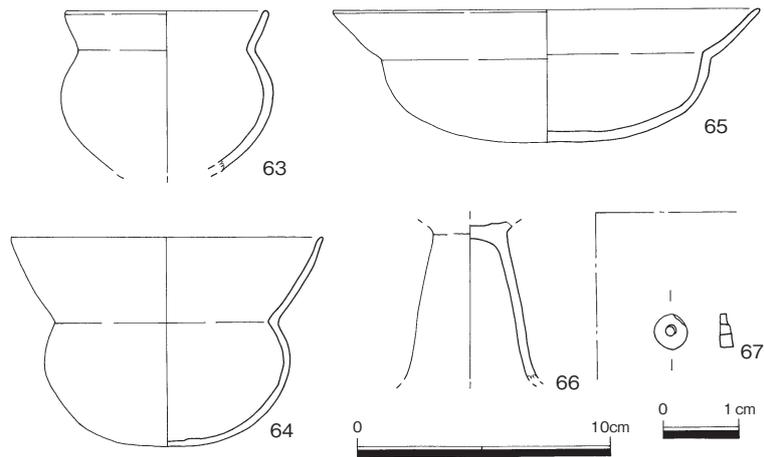
SD06 (第12図、写真13～15)

溝SD06は他の溝とちがって深く垂直に掘り込まれている。道路側溝の可能性はある。

第14図41は須恵器の坏身である。42・43は手づくねのミニチュア土器である。44・45は逆L字形を呈する弥生土器の甕口縁部。46・47は弥生土器の甕底部である。48は磨製の蛤刃石斧である。

SD07 (第12図、写真16・17)

第15図49～55は須恵器である。古墳時代後期から古代の遺物が混じる。49・50は坏蓋である。51はボタン状のつまみをもつ坏蓋である。52は高台を有する坏身である。53は高坏の脚部である。54ははそうである。55は大型甕の口縁部である。56は土師器の甕口縁部である。内面に粗いケズリ痕が残る。57～59は越州系青磁碗である。57の底部は蛇の目高台で畳付に砂目跡が残る。60～62は古代の瓦である。60は一枚作りの縄目叩きの平瓦。61は細かい斜格子叩きの平瓦。

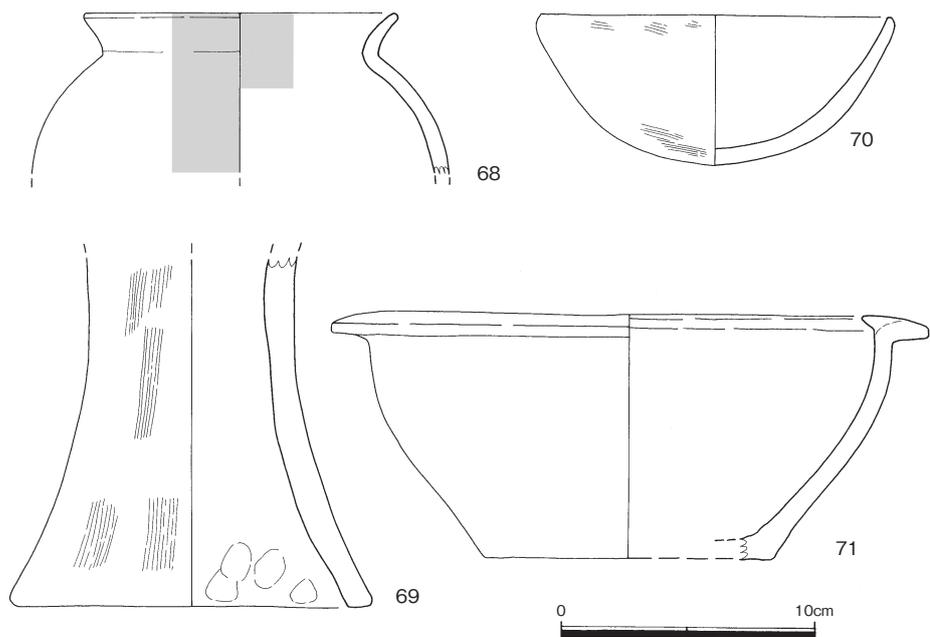


第16図 その他の古墳時代遺物実測図 (1/3、67は1/1)

## 6. その他の出土遺物

第16図は古墳時代の遺物である。63は小型壺である。64・65は埴である。66は高坏の脚部。67は滑石製白玉。

第17図は弥生時代の遺物である。68はく字状口縁の後期の甕である。69は器台または支脚である。70・71は鉢である。71は鋤形口縁を呈し、平底である。



第17図 その他の弥生時代遺物実測図 (1/3)

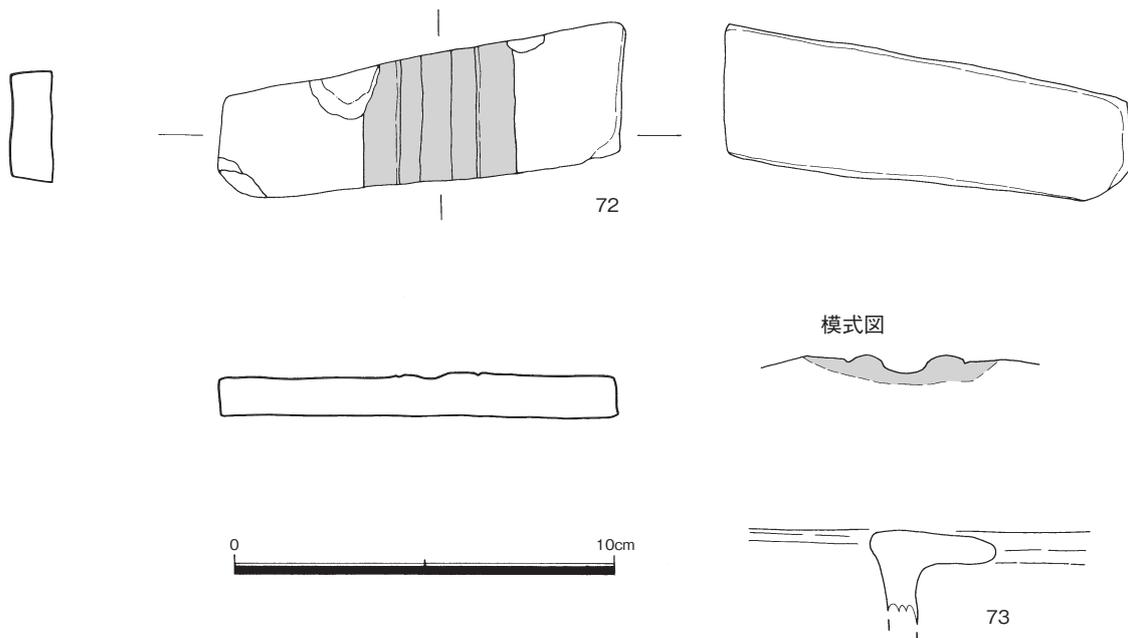
## 7. 銅戈鑄型

ピットSP154から銅戈鑄型を転用した砥石が出土した。共伴遺物は弥生土器の甕口縁部片 1 点だけである。鑄型の石材は石英斑岩である。以下、宮井善朗氏に所見をお願いした。

第18図72は銅戈鑄型を転用した砥石である。各面とも研磨調整されており、元の鑄型の法量はとどめていないものと思われる。砥石としての現状で、最大幅9.5cm、最大長3.5cm、厚さ1.1cmほどである。銅戈掘り込み部は黒変部とほぼ同一範囲で、最大幅3.9cmである。また銅戈部分は刃部、樋、脊が残存し、脊幅0.8cm、樋の幅0.8cm、刃部幅は0.9cmである。刃部、樋ともほぼ平行で、鑄型としての上下の向きについては疑問が残る。

現状がどの程度銅戈の原形をとどめているかについて手掛かりはほとんどないが、断面観察によると、黒変部と砥面の境である両刃部端付近を頂点として、砥石の両端部へ向かって低く（薄く）なっているのが認められる。従って再研磨は黒変部を避けて行われており、黒変部は原形に近い形状を残しているのではないかと考える。型式推定にあたっては、それぞれの厚さと幅といった法量及びその比率しか手掛かりがない。例えば先に記した法量から、脊幅／樋幅=1.0、脊幅／刃部幅=0.9の値が得られ、刃部、樋、脊がほぼ同程度の幅を持つことがわかる。また脊の掘り込みの深さが0.1～0.15cmほどであり、脊厚が0.2～0.3cm程度に還元でき、極めて薄いことがうかがわれる。これらの点を既知の例と比較してみよう。

比較対象は細形及び古式中細（中細A類）とする（注1）。これ以上はおおむね刃部、脊と樋の幅の差が大きすぎ、対象から外して差し支えないものとする。細形銅戈はI式、II式に大別され、厚く鑄が立つ脊を持つI式は今回の対象とは認められない。II式は胡が開かないII式a類と、胡が開くII式b類に分かれる。a類の代表例としては宇木汲田遺跡17号甕棺、吉武大石K53などがあり、脊幅／樋幅=1～1.1、脊幅／刃部幅0.8～1.1を呈するものが多く、本例と類似する。b類では脊幅／樋幅が1.2～3になるものが多く、脊や刃部に対して樋の幅が狭まっていく傾向が見て取れる。中細、中広でもこの傾向は継続する。以上のことから、鑄型に彫り込まれた銅戈は細形II a類の可能性が高い。



第18図 SP154出土鑄型および土器実測図 (1/2)

Ⅱ式 a 類細形銅戈は極めて薄手で脆弱であるという特徴があり、韓半島に類例がないことで国産の可能性も指摘されたり、また「前期末」とされる出土例によって、疑問視もされてきた。今回小片ではあるが、中期前半須玖 1 式土器（第18図73）と共伴しており、製作時期の一端を知ることが可能である。これまで発見されたⅡ a 類は甕棺出土のものとしては汲田式が主体であり、本例と矛盾しない。議論の対象となっているのは有田遺跡で「金海式」に伴って出土した例であるが、筆者がかつて考察したように（注2）、早良平野では金海式→汲田式の間には形式的なヒアタスがあり、金海式は城ノ越期あるいは汲田期まで残存する可能性があるため、汲田式に近い上甕の時期に従うべきであろう。従って細形Ⅱ a 類の使用の盛期は中期前半、汲田式期にあり、他の多くの初期仿製と大差ない時期に生産が開始されているものとみられる。（宮井善朗）

注1 銅戈の型式については吉田広編「弥生時代の武器形青銅器」『考古学資料集21』（2001）に依拠し、計測値については同書図47所載の諸例を図上計測した。計測箇所は刃部、樋、脊がほぼ平行になる身部中位である。

注2 拙稿「吉武遺跡群に関する若干の問題」『みずほ』第21号 1996 大和弥生文化の会

## 第4章 まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居 1 軒・井戸 1 基、弥生時代中期の土坑 2 基・井戸 1 基、古墳時代後期から平安時代にかけての溝 4 条のほか、ピット約80基を検出した。井戸SE11からはほぼ完形の甕、壺 6 点が出土した。溝はほぼ南北方向に軸を取る。近隣を通る古代官道の軸方向とは異なっており、周辺の地形（第2図）から見ても小地域的な区割りに伴うものと推測される。

SP154から銅戈鑄型が出土したことが特筆される。この鑄型で製作される銅戈は、脊厚が0.2～0.3 cm程度の極めて薄いもので、ペラペラ銅戈と俗称されている。ペラペラ銅戈（Ⅱ式 a 類細形銅戈）は韓半島に類例がないことから国産の可能性を指摘されてきた。その鑄型が弥生中期前半の土器と共伴して出土したことで国産説が裏付けられた意義は大きい。



写真1 1区全景（南東から）



写真2 2区全景（北西から）



写真3 3区全景（西から）



写真4 1区西壁土層



写真5 2区西壁土層



写真6 2区南壁土層



写真7 SC01検出状況（南東から）



写真8 SC01完掘状況（南東から）



写真9 SK04掘削作業（西から）



写真10 SK04完掘状況（北から）



写真11 SK09（東から）



写真12 1区 SD03 (南から)



写真13 1区 SD05・06 (北から)



写真14 2区 SD06・07掘削作業 (南から)



写真15 2区 SD06・07完掘状況 (南から)



写真16 3区 SD07完掘状況 (北から)



写真17 3区 SD07完掘状況 (南から)



写真18 SE10 (南西から)



写真19 SE11 (南西から)



72



15



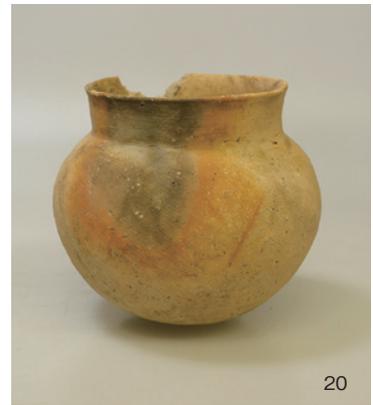
16



17



18



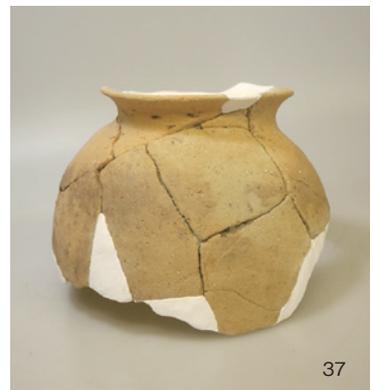
20



21



22



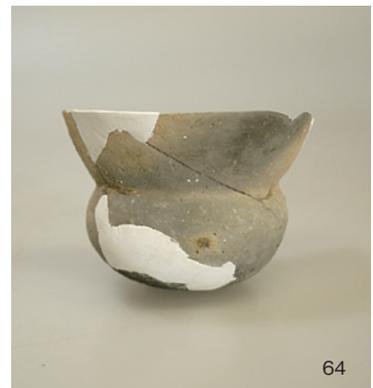
37



38



54



64

写真20 出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	さんのういせき							
書名	山王遺跡10							
副書名	—第12次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1362集							
編著者名	上角智希							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2019年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さんのういせき 山王遺跡	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 さんのう 山王2丁目38-1	40132	2379	33° 34' 43"	130° 26' 07"	20170808 ～ 20171016	368	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山王遺跡	集落	弥生時代・古墳時代・古代	竪穴住居・井戸・土坑・溝	弥生土器・土師器・須恵器		銅戈鑄型が出土。		
要約	山王遺跡は、比恵遺跡群とは旧河道の谷を隔てて東側に立地する。今回の調査では弥生時代の竪穴住居1、古墳時代の井戸2、古墳時代から古代にかけての溝4などを検出した。遺物は弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器を中心にコンテナ17箱分が出土した。注目すべき遺物として銅戈鑄型が出土した。							

## さんのういせき 山王遺跡 10

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1362集

2019（平成31）年3月27日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 松古堂印刷株式会社  
福岡市西区周船寺3丁目28-1



